

会報

秦 野

令和7年4月1日 第60号



弘法山山頂付近からの日の出

新編相模国風土記稿には、「古弘法此山上にて護摩修行をせしより名づく」との記述がある。現在は、春は桜の名所、四季を通じての人気のハイキングコースとして、秦野を代表する観光名所の一つとなっている。

NPO 法人 秦野歴史おこしの会

お葬式の昔・今



秦野商工会議所会頭

石井時明

格調高き、NPO法人はだの歴史おこしの会の第六十号会報誌に、私のような人間の寄稿を掲載していただき、感謝と戸惑いを禁じ得ないものです。学も知識も会員の皆様に到底及ばないことは明らかですので、私の職業としての歩みを申し上げお許しただきたいと存じます。

私は昭和三十一年、市内千村に生を受け、以来六十八年間秦野で暮らしています。私の父も千村に生まれ育ち、尋常小学校卒業後、小田急電鉄に入社しましたが、不惑の四十歳で脱サラし、二年間葬儀社での修行後に「さがみ葬儀社」を立ち上げました。

昔は葬式と言えば「村八分」の残り二分として、地域の重要な儀式でした。組内の方々は男衆・女衆と通夜、葬儀

の二日間は最低お手伝いする習慣でした。父親が開業した当時も、葬儀社というよりは葬具屋と言われる、葬具の貸出が主なものだったと思いますが、父親は葬儀の支度を、司会を含めた総合プロデュースを中心に提供していました。現在に至る葬儀社のはしりだったように思います。

そして、葬儀の場も自宅が主流で、まれに菩提寺である寺院で執り行っていました。組という数軒から十数件の単位の地域コミュニティの中での一大事業の一つでした。組内で亡くなる人があると、まずは組長にお知らせし、組内全員が葬家に集まり相談が始まります。葬儀の日程や規模、菩提寺への連絡、葬儀屋をどこに依頼するのか等々、組の方々がいなければ何も先に進まないのが当時の状況でした。ある程度の骨子が決まると、男衆は親戚や重要な関係者への葬儀日程の連絡（「さ」と称していたと思います）に出発します。また、葬家の片付けも男衆の大事な仕事の一つで、箆笥の移動など葬儀の会場づくりも仕事の一つです。

一方、女衆は年長を中心に、通夜・葬儀に向けて、親戚はもちろん参列者の為に料理の準備に取りかかります。当時、葬式には何々と何々と、大体の

メニューは決まっていました。買い物帳と言われる帳面を持って、魚屋、八百屋、豆腐屋、酒屋等々で材料調達に奔走し、葬家の台所で調理が始まります。

このように組の中での葬儀は、当事者に限らず、皆で行う重要なイベントでもありました。葬儀の場所が自宅から葬儀専用ホールに移行するまでは、地域での若干の違いはあるものの、祝儀、不祝儀に関して近所の対応は、我がことのように扱われていたと思います。

時は流れ、葬儀の場は自宅から葬儀専用ホールになり、家長を中心とした家制度から個の時代に移り、子供の数が少なくなり、亡くなる方も高齢になり、物理的に縁者が少なくなりました。「家族葬」と言うフレーズが認知され、コロナ禍が追い打ちをかけたこともあり、ご縁のあった方とのお別れを拒否する風潮も見受けられます。

葬儀の形態も多様性がもたらされていますが、葬儀の本質的な役割は変わらず残り続けていると思います。今後、葬儀の持つ意味が色あせることなく、故人を大切に思う心を伝える場を構築できるよう努力していきたいと思っています。

三浦乾也と光西上人を学ぶ 佐藤正男

令和六年九月七日に、本町公民館で定期講演会「十日市場の偉人・三浦乾也と光西上人」を開催し、会員ら六十七人が参加した。

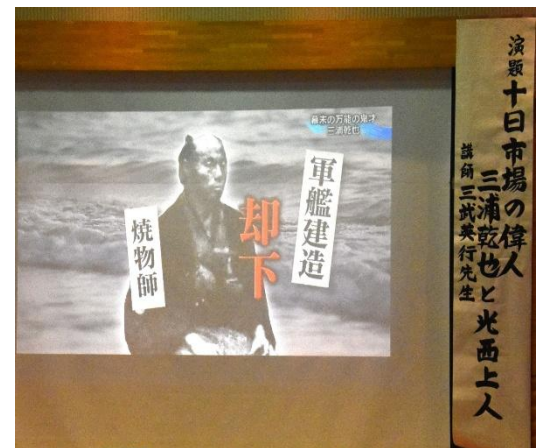
明治初期に秦野十日市場、尚古園で国産初の「電信用碍子」の試作に成功した多才な陶工「三浦乾也」、江戸時代享保年間に蓑毛大日堂を修復した木食僧「光西上人」。秦野にゆかりのある二人の足跡を、本市出身の郷土史研究家の三武英行さんが講演した。

講師の三武さんは、明治期まで十日市場と呼ばれた曾屋の生まれ。自分の名字が珍しいと三武家・ミタケ姓のルーツ探しを始め、それを契機に郷土の歴史と陶器の調査研究に没頭するようになり、三浦乾也の研究者として、著作や作品収集を行っている。

講演では、三浦乾也が京焼の巨人と評された尾形乾山の陶風を継承する陶工だけではなく、幕末のペリー来航から蒸気船・軍艦の製造や製鉄、硝子製



講演をする三武英行氏



画像も交えて三浦乾也を紹介

造なども手掛けた殖産興業に大きな足跡を残した人物であることが紹介された。さらに、明治二年に梶山良助の招きで十日市場に尚古園を築窯し、翌年に電信用碍子を制作。秦野を離れた後も乾也と良助の交流は続き、後の陶管による近代水道「曾屋水道」に少なからず影響を与えたことなど、乾也と秦野との関りを改めて知ることができた。また、講演に合わせて、会場の本町公民館ロビーで、三武さんが所蔵する、乾也作の「尚古園焼」が展示されたが、初公開の「尚古園焼」に多くの来場者が目を輝かせていた。

次に、大日堂中興の祖である光西上人の講演では、光西上人が全国行脚で浄財を集め、荒れていた大日堂を修復した後入寂し、遺言により二百年後の昭和十年に発掘されたが、発掘当時の記録や、十日市場の名主であった三武家の系図や古文書に基づき、光西上人

が親族と伝わる三武家について紹介された。また、現在、大日堂の二王像の修復が行われているが、解体したときに発見された江戸時代元禄年間の木簡についても記述の解説があった。

今回は、秦野にゆかりのある人物を紹介する講演だったが、講師の三武さんの地道な調査に基づき、これまで知られていないことに光を当てた有意義なものだった。

講演終了後、はだの大日堂保存会の島田利子理事から、大日堂二王像の修復状況の報告があった。阿形像の傷みが進んでおり、頭部の修復にはC Tスキャンをしてから作業を進めていることや、三武さんの講演にもあった木簡の説明があった。木簡の中には「大住郡三ノ宮村（現伊勢原市三ノ宮）大工傳右衛門」の記述もあったという。

二王像は令和九年度末に修復が終了するが、現在、仁王門の修復作業が進められている。大日堂は、境内の四つの建物は国登録有形文化財に登録され、多くの仏像が県・市重要文化財に指定されている貴重な歴史的資源。

はだの大日堂保存会では、市民などからの寄付金をはじめ、行政や支援財団からの補助金・助成金などを活用して、順次修復に努めている。

これまで、はだの歴史おこしの会も支援を行ってきたが、修復の報告を受け、さらに支援の輪が広がる必要があると思った。

源実朝公ゆかり鎌倉散歩 小澤恵一

十月三十日、鎌倉国宝館での学芸員の解説を目玉に、参加者二十三名で市外研修を実施した。

最初は横浜市栄区にある真言宗田谷山定泉寺を参拝。ここは通称「田谷の洞窟」と呼ばれていて、鎌倉時代より存在すると言われる人工の横穴洞窟で、全長約五百七十メートル三層構造を成し水源もある。鎌倉の時代から洞窟の本尊弘法大師を祀る真言密教の修業の場とされている。当洞窟本来の密教系の石仏群の他、江戸時代中期に祀られた秩父三十四観音、西国三十三観音、坂東三十三観音さらに四国八十八観音などあわせて二百体以上の石仏が安置又は壁面に掘られていて、東国で



鎌倉国宝館前での記念撮影

は有数の観音霊場だ。地質は凝灰質砂岩で、柔らかく加工しやすくノミの跡がはつきり残り、小ささまざまなドーム状空間があり石仏が祀られている。暗い洞窟内をご灯明のローソク手燭台で照らすと石仏が浮かび現われ、幻想的でまさに神秘の観音霊場の洞窟である。参拝の前に「住職の法話があり」迷

いのある人行いの悪い人は洞窟から出られない、足元を照らす「蠟燭は燭台灯ではなくご灯明であり、持ち帰り仏壇に供えるもの」との教えがあり、各自に手燭台と蠟燭が手渡された。

参加者から、「以前から参拝したいと思っていて念願がかない想像以上であった」、「思わぬところでご先祖の供養ができた」、「ご住職の法話が楽しく有意義であった」などの感想があった。約一時間の参拝後全員バスに戻ったが、本日の参加者には、迷いのあるもの、行いの悪いものはいないようだ。

昼食後、鎌倉国宝館で学芸員の解説を聞きながら、源実朝公の五輪塔を拝観した。毎週水曜日の午前に学芸員による展示物の説明があり、本日は一般解説の後、午後の時間に解説をお願いしていた。源実朝公御首塚五輪塔は、説明文に木造漆塗り高さ百五十四センチ鎌倉時代（作）所蔵金剛寺とあり、陳列台に乗ると小柄な大人の等身大くらいで、八百年以上経過しているのので漆の塗りは落ち、木地の木目年輪が現れ、まるで円空仏を見ているように実



鎌倉国宝館にある源実朝公御首塚木造五輪塔

に素朴で荒々しく、想像よりも豪壮で迫力がある。特に三番目三角形の火輪は反り上がり重厚感があり迫力を感じて。八百年経った今実朝公が何かを訴えているようだ。説明文には「秦野の金剛寺の近くには実朝公首塚があるが、かつてはこの木造五輪塔が建っていたという」「新編相模国風土記稿」によれば、武常晴が実朝公の首を持ってきて、退耕行勇を導師として埋葬した際、この五輪塔を建てたとされている」とあり、二〇二一年大河ドラマ放送中は、拝観者の列が絶えなかったということだ。我々の会が秦野市民で特別な思いがあることを心得て丁寧にお話ししていただき、質問にも気軽に答えさせていただいた。私も念願がかない爽やかな気分でした。

大河ドラマでふると公園にある実朝公御首塚が紹介されことや鎌倉国宝館の説明文に秦野金剛寺や武常晴の名もあり、ますます実朝公に寄せる思いが強まり、秦野市民の誇りとして御首塚をしつかり後世に伝える事の誇りと義務感を感じながら鎌倉を後にした。

蓑毛大日堂二王像に

思いを寄せて・私の視点

戸口あや子

令和五年五月二十二日・二十三日に、仁王像は、修復に向けて仁王門より搬出されました。二日間の見学に通い、二十三日の夕方、雨天の中、県道より後姿を皆で見送り、一時の別れですが、目が潤んだのがついこの間のような気がいたしました。今回途中経過の見学に、NPO法人はだの大日堂保存会様のお誘いで、小田急線豪徳寺駅で下車し、像の修理をお願いしている明古堂に行つてまいりました。

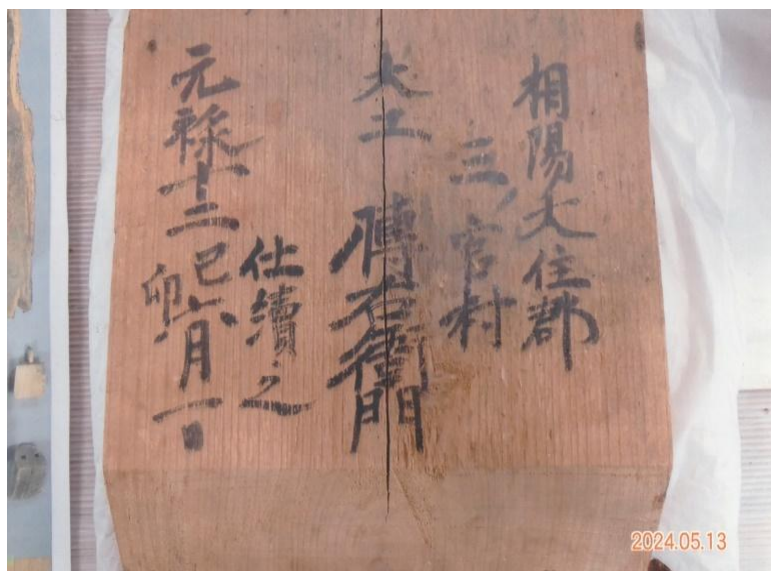


傷みが進んだ阿形像の頭部を3Dスキャンし作成した頭部（写真上）。修復には新たに作成した頭部を使用する予定

二王像は丁寧に並べられ横になつておりました。仏師の明珍さんはじめ、スタッフの方々の御説明があり、これから徐々に進められていく様子でした。撮影をどうぞとのことでお許しをいただきました。

私の視点

発見された墨書について考えてみたいと思ひました。墨書の元禄十二年（一六九九）とは、江戸幕府将軍綱吉の時代です。江戸幕府の寺社大工、そして徳川幕府のおひざ元、相模国の大



二王像の体内から発見された墨書

工はどうなつていたのか。元禄六年（一六九三）十一月の大山寺大修造があつたが、その時、明王権現社の造営があり、棟札には手中明王太良吉の名が現れる。

時代が流れ、石尊宮（大山寺）の棟札「上棟年代・享保五年（一七二〇）、大檀那・將軍吉宗、工匠名・大工棟梁（手）中明王太郎吉富、脇棟梁・大貫勘兵衛、同・武藤武兵衛、同・米山源右衛門、同・斎藤傳右衛門」

二王像の体内から発見された元禄十二年（一六九九）の墨書にある「相陽大住郡三宮村 大工 傳右衛門：」は、石尊宮の棟札にある斎藤傳右衛門と同一人物または、斎藤傳右衛門は、大工傳右衛門の子孫ではないかという見解です。（享保五年は元禄十二年の二十一年後）

「二王像 寄生の虫と共に生き 手足をのびりハビリ中」

数年後には修復されたお姿でお帰りになります。楽しみにお待ちしたいと思つております。

追伸・傳右衛門氏のことと御意見がございましたら、御連絡お待ちいたしております。

※参考文献「宮大工の技術と伝統・神輿と明王太郎」 手中 正著

弘法山の鐘楼

中村 貢

昨年十一月に本会の調査研究の一環として、弘法山の梵鐘を見学してまいりました。

天保四十二年（一八四一年）に成立した「新編相模国風土記稿」によれば、弘法山は、弘法大師が護摩修行をした地であることから「弘法山」と呼ばれ、鐘楼のほかにも、密宗の釈迦堂や弘法の石像、福泉庵と号した庵室もあったが荒廃し、僧永芳が釈迦を安置する堂を建立した後、龍法寺持ちとなったと記されています。

弘法山の梵鐘は、現在二代目で初代の梵鐘は、宝暦七年十二月（一七五七年）に設置されたが、山火事により損傷し、現在の梵鐘が、四十年後の享和元年五月（一八〇一年）に再築され、現在に至っています。櫓の築造については不明ですが、長い風雨により四本



弘法山の鐘楼



梵字が書かれた小石

の柱は、礎石の上ではなく、根太より立ち上がっているため、根太とともに柱下部の痛みが激しく大風による倒壊が危惧される状況でした。また、以前櫓の周囲には梵字が書かれた平たい小石が敷き詰められていましたが現在では山頂部にビリが撒かれ、その小石（写真参照）を発見するには時間がかかりました。弘法山に行った折には是非探してみてください。

梵鐘に刻まれている作られた経緯や、寄進者の氏名や居住地を見ると、本梵鐘は梵鐘を管理している寺だけではなく、相模川以西の近郊近在の居住者や、江戸在住の有力者など、総勢四百八十三名が寄進者として名を連ねています。古来より、弘法山の鐘の音が多くの人に愛されていたかが伺える証でしょう。



亀谷山龍法寺 古くは真言宗であったが、室町時代の後期、大永・享禄のころ曹洞宗に改められたという

本梵鐘を管理していますのは、弘法山の南麓の亀谷山龍法寺で、我が家の菩提寺です。寺に行った折に梵鐘の話をしたところ、櫓の損傷が激しく、檀家の少ない龍法寺では修復は困難であるため梵鐘を寺に下ろそうと相談しているとのことでした。

先にも述べたとおりこの梵鐘は、多くの住民の寄進により作られたものであり、過去から今に至るまで、市民の財産であるといっても過言ではないと思います。梵鐘を今後多くの人により守り、後世の人に引き継いでいく手段を今後検討していきたいと思っています。

※参考文献「はだの弘法山洪鐘 釣鐘が語る」石井敏雄著

酷暑と地球温暖化

横溝 彰

私はこの分野に明るいわけではありませんが、子どもの頃からの農業の手伝いや社会人になっての転勤、旅行等で得た体験から温暖化による変化について私見を交えて触れてみました。

(一)温暖化はこうした形で私たちの身の回りに認められる。

①六十五年前、秦野市内ではクマゼミの鳴き声は聞くことができたが、それもたまにであり、クマゼミは高い樫のてっぺんに止まっていて採れなかった。夏休みの昆虫採集の標本には、クマゼミの場所を確保していたがいつも空席でくやしい思いをしたものだ。

五十五年程前の夏休み、三重県紀伊長島にある旅館（友人の実家）に泊まった際、朝、目を覚ますと旅館の裏庭はクマゼミがいっぱいで、木に登る順番を待っているようなじゅじゅつなぎ状況。クマゼミが地面に腕立て伏せのような形でシュンシュンシュンと鳴いているのは驚きであった。勿論、クマゼミは手でつかまえることが出来た。

さて、二〇二四年の酷暑が叫ばれている市内ではどうだろうか。あちこちでクマゼミがミンミンゼミに混じってシュンシュンと当たり前のように鳴いていて耳には「シュンシュン・ミンミン」と重なった鳴き声が残っている。

五十〜六十年の間にクマゼミの北上で周辺の生態も大きく変わってきている。

②秦野名産の落花生は

―落花生は今も秦野の主要ブランドに変わりはないが―

私の祖父夫婦とその兄夫婦は明治時代北海道十勝（現在の芽室町）に新天地を求めて入植。後に私の祖父一家は実家の兄が早世したために分家と言う形で秦野に戻るようになった。父の話であるが十勝の叔父夫婦のところには秦野の落花生を度々贈っては喜ばれたそう。十勝では故郷の味だとして入植者仲間に配っていたようだ。昭和の中頃、父は叔父の依頼で何度か落花生の種豆を送ったとのこと。叔父は十勝で栽培を企図したらしいが寒さで結局はうまくいかなかったらしい。

コロナ前、芽室町在住のところが、温暖化の影響からか隣の帯広で落花生が栽培できるようになったと「十勝グランナッツ社」製のレトルト処理した落花生を届けてくれた。帯広では落花生の栽培面積も徐々に拡大しているという。更に隣の芽室町でも若手農家が新しい作物として「メモロピーナッツ株式会社」を興し地域のブランドにしようとして、こちらも最新の農業技術を駆使して作付面積の拡大を図っている。

一方、秦野市内の関係者の話では農業者の高齢化や後継者がいない耕作放棄地の増加等で作付面積の縮小もあり収穫量が先細りの状況であると聞く。



常温保存可能な
レトルトゆで落花生

秦野の名産落花生は収穫量の減少と温暖化による変化で今後の栽培についても大きな変革が迫られている。

追記、北海道、十勝開拓の先駆者として依田勉三（伊豆国那賀郡大沢村・現在の松崎町・嘉永六年生まれ）が幾多の困難を乗り越えて十勝開拓を進めたことが礎で勉三の組織した晩成社が広大な十勝平野を農地に変えていった。依田勉三がこの世を去ったのが大正十四年（一九二五）であるから明治三十八年入植の祖父兄弟は勉三と晩成社の世話になったと推察される。そんな経緯もあり私は「開拓に努力し苦難と戦い続けた先人の姿を記憶に残しておきたい」と三度、十勝（帯広と芽室）を訪ねている。芽室町の資料では当時の芽室に入植した神奈川県出身者は私の祖父兄弟だけであるが、歴史おこしの会の皆さんの中で他に十勝への入植者の情報があれば、ご教示願いたい。

(二) 朝作り

①「僕のあさづくり」は小学六年で

入選した作文のタイトル。私は小学五年の時に父が亡くなり、兄とで農業の母親の手助けをして何とか暮らしが成り立っていた。当然だが二人は学校へ行かなければならない。従って畑仕事は夜の明けぬうちからの作業で、いわゆる「朝作り」であつた。七時の専売工場のサイレンが鳴ると仕事を止めて家に帰り、朝飯をかつこみ学校へ急いだものだ。

子どもなりに、兄と工夫を重ねることで落花生や野菜の収量が増えていった気がする。一時期は叔父のアドバイスで細作りの大根を栽培して野菜市場（当時は本町の台町にあつた）で仕入れてもらい学費の足しにしたものだ。当時の朝作りはいわば労働力の補充であつた。それから六十五年を経て、私の今の朝作りは毎朝四十分のゴミ拾い、秦野の四季の移ろいを味わいながらゴミはもとより様々なネタを拾い上げ俳句や短歌の素材にしている。

②今も農家の皆さんの朝は早い。近年、秦野ではオリーブや青パイアといった従来は温暖な地で栽培されていたものを手掛けている畑が目についてきた。こうした中で農家の皆さんの健康を考えれば、朝の涼しいうちに作業をすることが必然となっている。

いずれ、見慣れた里山の風景も温暖化や農業者の高齢化そして後継者の減少による耕作放棄地の拡大もあり、少しずつ変容を迫られてきそうである。

★新入会員です よろしく

加藤 澄子	北地区
小嶋 和義	北地区
相原 敏夫	北地区
平野 義耀	本町地区
石井 時明	本町地区
吉川 善蔵	大根地区

祝・創立三十周年

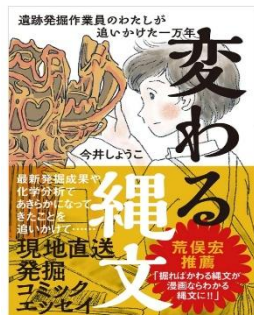
秦野歴史おこしの会は、令和六年（二〇二四年）で、創立三十周年を迎えました。

令和七年度は、十月二十五日（土）に創立三十周年記念事業として、記念講演会、会員懇親パーティー、記念品の贈呈などを計画しています。

紹介します

当会会員の今井しょうこさんが、コミックエッセイ「変わる縄文」を出版しました。

「マンガでわかる考古遺跡発掘ワーク・マニュアル」「マンガでめぐる考古遺跡・博物館」に続く3作めとなります。ぜひ、ご一読ください。



養毛大日堂二王像の修復に60万円を寄付

宝蓮寺が所有し、NPO法人はだの大日堂保存会の協力により令和5年5月から修復が進められている養毛大日堂二王像（秦野市指定重要文化財）の修復資金として、令和6年8月6日に、当会からNPO法人はだの大日堂保存会に対して60万円を寄付いたしました。

◆総会・講演会のお知らせ◆

総会

令和七年五月十一日（日）

午後一時～

場所 秦野市立本町公民館

二階多目的ホール

講演会（総会終了後）

演題「近世丹沢山地の景観と環境」

講師 早田 旅人氏

平塚市博物館学芸員

発行責任者

秦野市羽根七〇七

小泉 孝

電話 〇四六三―七五―〇〇六七